

令和8年度 第2回めぐろスマイル会議 報告書

1 実施概要

日 時 : 令和8年8月8日(土) 14:10~17:10
開 催 場 所 : 総合庁舎2階 A,B,C会議室
参 加 者 : 8名

2 タイムテーブル

時刻	内容
14:10~14:15	(1) 第1回のおさらい
14:15~14:20	(2) ロゴの作成、Teamsの利用方法に関する説明
14:20~14:35	(3) グループワークテーマに関する説明
14:35~14:40	(4) 初めて参加される方の紹介
14:40~15:45	(5) グループワーク①
15:45~16:05	(6) 発表・講評①
16:05~16:10	休憩
16:10~16:50	(7) グループワーク②
16:50~17:10	(8) 発表・講評②
17:10	終了

3 会議内容

(1)第1回のおさらい

はじめに、
・めぐろスマイル会議の目的・目標・スケジュール
・第1回の様子
など、第1回で話した内容のおさらいをしました。



<画像1:第1回のおさらいの様子>

(2)ロゴの作成、Teamsの利用方法に関する説明

子ども若者課より、ロゴの作成、Teamsの利用方法に関する説明を行いました。
ロゴの作成では、令和7年度の取組の紹介と、今年度の進め方について、Teamsの利用方法では、今後の連絡方法としてTeamsの利用を検討している旨と、利用方法について説明を行いました。



<画像2:ロゴ、Teamsの説明>

(3)グループワークテーマに関する説明

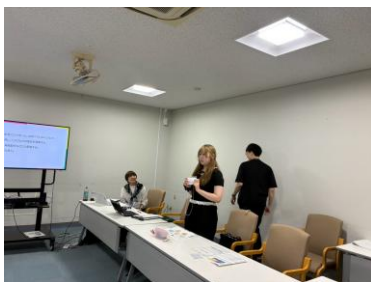
第2回のグループワークテーマに関する説明を行いました。
A班、B班それぞれの班で第1回で話した内容を振り返りながら、内容をさらに深掘りし、参加者の視点ならではの提言を作してほしいことなどを、事務局から改めて説明しました。



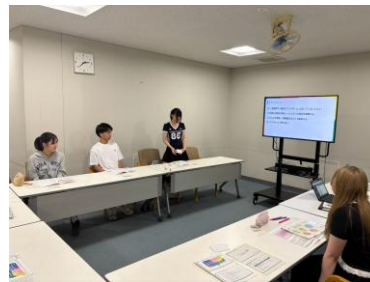
<画像3:グループワークテーマの説明>

(4)初めて参加される方の紹介

第2回から参加した2名の方に、自己紹介をしていただきました。



<画像4:はじめての参加者の紹介①>



<画像5:はじめての参加者の紹介②>

(5)グループワーク①

グループワーク①では第1回の議論をベースに、案の深掘りを行いました。「現状」「理想」「課題」「提言」「効果」の項目に分け、それぞれの項目において、参加者一人一人が日々の生活の中でどのようなことを感じているか、どんな目黒区にしていきたいか、について意見交換を行いました。

ア グループワークであがった主な意見(A班)

【地域のつながり、コミュニティの必要性について】

- ・町内会に参加しているけど、「今の子どもたちは気を配らないから、大丈夫なのか？個人主義すぎて、いざという時にまとまるのか？」と言われた。
- ・コミュニティがバラバラになると、いいことはない。今は隣の人も全然知らない。ゴミの出し方もバラバラ。前まではまとめて出していたけど、今は自分の家の前に出している。
- ・久しぶりに小学校の友達で集まったら、とても楽しかった。区外の学校に行っているが、学校だと競争が激しい。地元の友達はたわいもない話ができて、「いつでもそこにいるよ」という感じで安心できる。
- ・学校生活だと、自分と他の人を比較しているなど感じた。大学受験のことも考えてしまう。比較をもたないで話せるような、ありのままでいられる場所も大切。第二の居場所として必要。
- ・インターネットがあるのはいいけど、対面でコミュニケーションをとることが大切。
- ・区外の学校に通っているのでも、目黒区(地元)に友達がほしい。
- ・高校生になって体を動かして遊ぶことがなくなった。小学生のころは牛乳じゃんけんやランドセルじゃんけんをやったり、「遊び心」があった。
- ・いまは遊ぶことにも「生産性」の有無を気にしてしまう。周りの目を気にするようになった。
- ・いい大学に行きたい、など、大人の評価も気になってしまうようになった。
- ・地元の友達と話していると、しがらみから解放される感じがある。地元の友達は未熟な小学生時代をともにした人だから、恥ずかしさもない。



<画像6:A班グループワークの様子①>



<画像7:A班グループワークの様子②>

【SNSの利用や、対面での交流の重要性について】

- ・喧嘩をしたとしてもSNSを活用して謝ったり、解決したりすることは真面目じゃないと思う。
- ・謝るなら対面でコミュニケーションをとることが大事だと思う。
- ・SNSを見ていると投稿内容と自分を比較したり、バイアスがかかった情報を入手し続けてしまう。
- ・対面でお話をしていると、一人ひとりが色々な選択をして、いろんな生活を送っていることに気づき、自分の視野が狭くなってしまっていたことに気づき、解放されるような感覚になる。
- ・SNSの弊害はあるけど、発信を広く伝えるためのツールとしては、活用すべきだと思う。



<画像8：A班グループワークの様子③>

イ グループワークであがった主な意見(B班)



<画像9：B班グループワークの様子①>



<画像10：B班グループワークの様子②>



<画像11：B班グループワークの様子③>

【地域のつながり、コミュニティの必要性について】

- ・学校で毎日会う友達とは違う友達が欲しい。夏休みに友達と遊びに行こうとすると、学校の友達は区外だから、誘える友達がいない。学校の友達と会うには、お金がかかる。
- ・地元のお洒落なカフェができた時に誘ったり、共有したりできる友達が欲しい。
- ・地域のお祭りにも、一緒に行く友達がいないから、行こうと思えない。
- ・成人式も、一緒に行く友達もいないし、写真を撮ったりもできないから、行かなくていいか、と思ってしまう。前撮りだけで十分。
- ・本や生活に活かせる情報を共有できる仲間が欲しい。
- ・学校の友達は、学校にいる間しか会わない。卒業したら疎遠になってしまう気がする。「有限」な友達。地元との友達はいつでも気軽に会えるし、会うのにお金もかからない。「無限」の友達、という感じがする。

【地元の友達に求める年齢差について】

- ・学校内と学校外で感覚が違う。学校内だと学年差を気にするが、学校外だとあまり気にならない。
- ・同年代だと、3歳差くらいまでのイメージ。

【多世代交流の有無について】

- ・同年代より、違う年代の方との交流機会の方があがる。介護施設のボランティアに行っているのだから、おじいちゃん、おばあちゃんとの交流はある。95歳の方から戦争の話を聞いたり。気を遣わないから楽しい。
- ・保育サロンの乳幼児のボランティアをやっているのだから、乳幼児との関わりはある。
- ・年齢差だけでなく、国籍の違いだったり、異文化のことを知られたら面白いと思う。

(6)発表・講評①

グループワーク①で出た意見をもとに、「現状」「理想」「課題」「提言」「効果」について班ごとに発表を行いました。

ア A班の発表

- 【現状】・地元との分断
・個人主義とSNS
→SNSの情報に支配されている
バイアスや周りの目による支配
- 【理想】・しがらみからの解放
・地元にある“居場所”を思い出す
・みんなのよりどころである「めぐろ」を目指す
- 【課題】・課題の深刻さを若い世代が認識できていない
・よりどころがない
- 【提言】・いつでも君の隣に“めぐろ”(仮)
- 【効果】・(小学校の友達との時間をつくると)未熟だったところを知っているからこそ素を出せる
・周りと比べることによる孤立がなくなる



<画像12:A班発表の様子①>

イ A班への講評

発表を受け、子ども若者課およびファシリテーターから講評、アドバイスを行いました。



<画像13:A班講評の様子①>

- ・子ども若者課
課題感や理想について、みんなの本音が聞けてよかった。「どんな居場所だったらいまの課題を解決できるか?」について、もっと深く知りたい。
- ・ファシリテーター
区外の学校にいるとき、日頃からみんながどれだけ頑張っているか、ということが伝わってきた。同時に、みんなの心のよりどころとなるような場所を「地元」である目黒区が求められている、という、区のポテンシャルを感じることができた。提言の中身を作り込んでいくのが難しいと思うが、どういう場所であれば「しがらみから解放」されるか、深めていってほしい。

ウ B班の発表

- 【現状】・共同体意識の喪失
・中高生の地元離れ
(具体例)
・学校の友達と会うのも気を遣う、みんなで同じ金銭負担になるように、とか
・成人式を友達と一緒に楽しめない
・地元のお祭りを地元の友達と一緒にいきたいけど行けない
- 【理想】・”無限の友達”をつくりたい
・もっと濃密な地縁関係を!
(具体例)
・目黒川のお花見を一緒に行けるような友達がほしい
・気楽に、気軽に会える友達が欲しい



<画像14:B班発表の様子①>

エ B班への講評

発表を受け、子ども若者課およびファシリテーターから講評、アドバイスをを行いました。



<画像15: B班講評の様子①>

・子ども若者課

いかに地元の友達がいた方がよいか、というのが切実に伝わった。東京にいと色々な人と繋がる可能性がある中で、「地元の人と繋がっていたい」という言葉を聞いたことが良かった。

・ファシリテーター

「無限の友達」という概念が面白いと思った。今後提言を作っていくにあたり、気軽に誘える友達をどう作っていくのかが難しいと思ったので、具体化を頑張ってもらいたい。

「現状」の項目にあった、「共同体意識の喪失」という言葉がどこから出てきたのか気になった。みんなの発言の中から読み取れなかったもので、本当に感じている課題はどこの部分になるのか、もう一回精査してみたい。

(7)グループワーク②

発表・講評①を受け、再度グループワークを実施。

提言の具体的な内容について再検討、議論の深掘りを行いました。

ア グループワークであがった主な意見(A班)

【前述の課題を解決する「居場所」の中身について】

- ・居場所の一つとして、「子ども食堂」がある。小さい子から大人まで集まって、「食」をテーマに助け合いや触れ合いが生まれるのは良い。
- ・区のホームページで調べたら、生け花教室のボランティア案内などもあった。たくさんあるが知られていない。
- ・中目黒公園の「自然を見る」というイベントもあった。行けるかなと思ったが、忙しい中で時間が合わず、難しい。
- ・個人でやることより、「みんなでなにかやる」というイベントの方がよい。
- ・成人式を変える、というのも良い。
- ・成人式よりもう少し若い年代で集まる機会を作る、とかも良い。17歳で集まる、とか。

【参加しやすい日時について】

- ・土曜日午前開催のイベントが多いが、土曜日の午前には学校があるから行けない。



<画像16: A班グループワークの様子④>



<画像17: A班グループワークの様子⑤>

イ グループワークであがった主な意見(B班)



<画像18:B班グループワークの様子④>



<画像19:B班グループワークの様子⑤>

【“無限の友達”をつくる方法について】

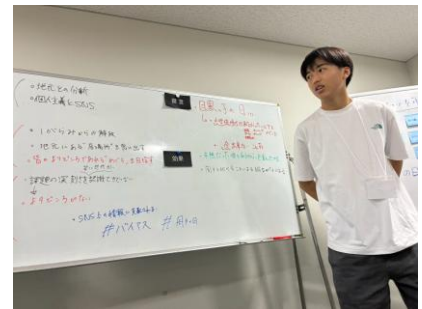
- ・農作業をしていた時代は共同作業を強いられていたので、必然的につながる機会があった。その観点で言う、区から若者にミッションを課す、というのも有りなのではないか。
- ・ご褒美として5Gを使える、とかがあると若者は参加する。
- ・何人かで集まって解決する、区内の公共施設をめぐるスタンプラリーのような企画もあり。
- ・「地元の友達がほしい」という人って実はいっぱいいて、毎日すれ違っているかもしれないのにきっかけがないだけ。
例えば、電車で並ぶときに「地元の友達が欲しい人専用レーン」や「専用車両」なんかがあると良いのでは。
- ・「地元の友達が欲しい人シール」をつくって、家に貼る、とかでも良い。
- ・公共機関でやるのは非現実的だが、例えば、お祭りの時に「地元の友達が欲しい人用のリストバンド」をつくって付けてもらう、とかであれば現実的。

(8)発表・講評②

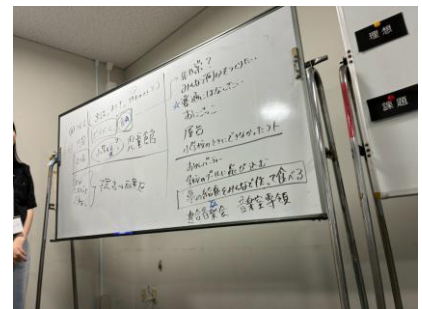
以上のグループワークを経て、第2回会議の最終発表を行いました。

ア A班の発表

- 【現状】・地元との分断
・個人主義とSNS
→SNSの情報に支配されている
バイアスや周りの目による支配
- 【理想】・しがらみからの解放
・地元にある“居場所”を思い出す
・みんなのよりどころである「めぐろ」を目指す
- 【課題】・課題の深刻さを若い世代が認識できていない
・よりどころがない
- 【提言】・目黒っ子の日
小学校時代にできなかったこと、今できないことをするイベント。
17歳の時に小学校に集まって、普通に話をしたり、鬼ごっこをしたり、おかしパーティーをしたり。夢の給食をみんなで作って食べる、なんていうこともやってみたい。
- 【効果】・(小学校の友達との時間をつくると)未熟だったところを知っているからこそ素を出せる
・周りと比べることによる孤立がなくなる



<画像20:A班発表の様子②>



<画像21:A班発表の様子③>

イ A班への講評

発表を受け、子ども若者課およびファシリテーターから講評、アドバイスをを行いました。



<画像22:A班講評の様子②>

・子ども若者課

きっかけを作ってあげることが重要、ということがよく分かった。「目黒っ子の日」に集まるのは高校生世代だけなのか、地元の大人もいたほうがよいのか、が気になった。

・ファシリテーター

日々のストレス社会からの解放、という点では、お祭りの概念に近いと感じた。ただ「目黒っ子の日」だけだと他の区でもできてしまうので、目黒区ならではの視点を入れると良いと感じた。

ウ B班の発表

【現状】・同郷の友人の”品薄”

(具体例)

- ・お金をかけず気軽に会える友達がいない
- ・一緒にお祭りに行く友達がいない
- ・成人式に一緒に行く人がいない

【理想】・”無限の友達”が欲しい

- ・もっと濃密な地縁関係を！

(具体例)

- ・地元のイベントに気軽に一緒に参加できる友達が欲しい
- ・同じ地元の話題で盛り上げたい
- ・人生で深く関わりあえる”無限の友達”が欲しい
- ・一緒に本の話題で盛り上げられる友人が欲しい

【提言】①区から若者にミッションを課す

(具体例)

- ・みんなで共同作業しないといけない環境をつくる
- ・公共施設をみんなでめぐるスタンプラリー等
- ・ご褒美も出す

②日常を生かしたきっかけづくり

(具体例)

- ・電車で並ぶ時に「地元友達欲しいレーン」や「友達欲しい人専用車両」をつくる
- ・お祭りの時に、「地元友達欲しい人専用のシールやリストバンド」をつくる

【効果】・共同体意識の育成

- ・中高生の地元離れの抑制



<画像23:B班発表の様子②>



<画像24:B班発表の様子③>

Ⅱ B班への講評

発表を受け、子ども若者課およびファシリテーターから講評、アドバイスをを行いました。



<画像25: B班講評の様子②>

・子ども若者課

皆さんの本音が聞けてとても嬉しかった。区から若者にミッションを課す、というのも、今後できると感じている。

自分自身も学生のころ友達が欲しいと思ったことがあるので、一人一人の思いを視認できるものをつくる、というアイデアも良いと思う。



<画像26: B班講評の様子③>

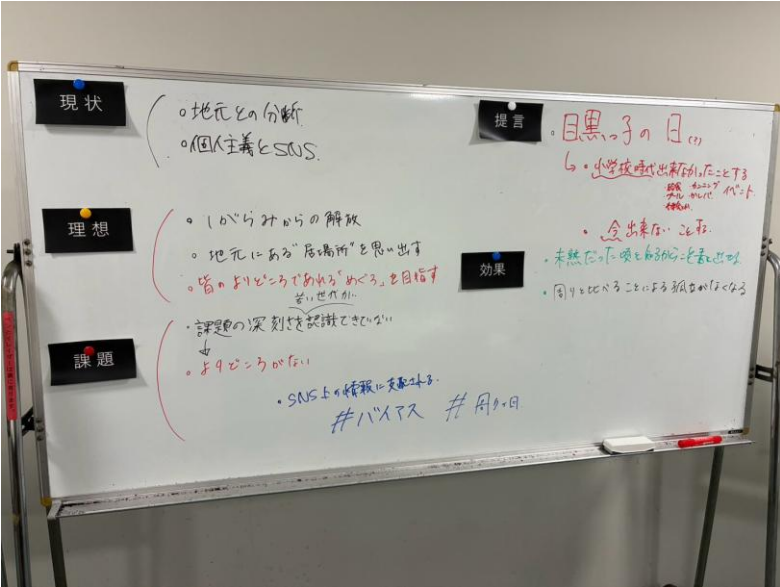
・ファシリテーター

地元の友達と学校の友達の概念が違う、ということが新鮮だった。地元の友達が欲しい、というのは、若者世代に限らず他の世代でも必要なのではと感じた。

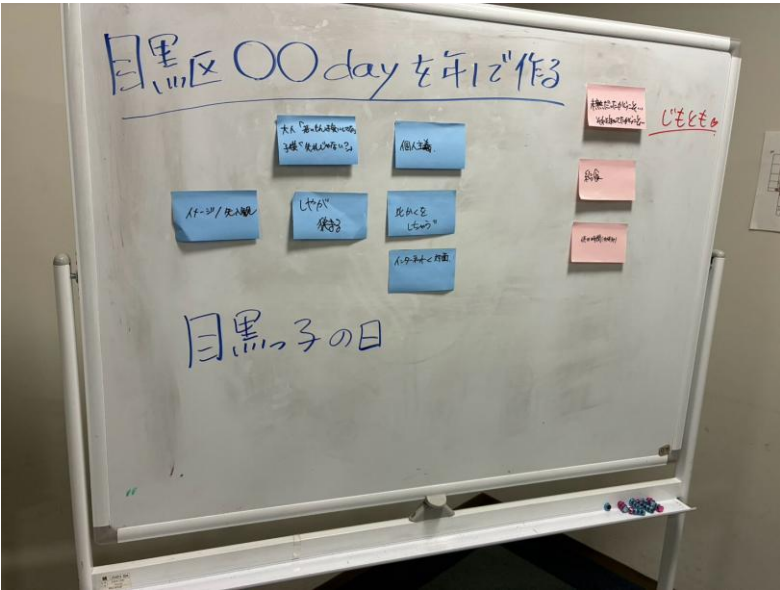
言葉の定義が整理されていて分かりやすかった。何かルールを設定してミッションを課すと、共同体意識が生まれる可能性もある気がした。

シールやリストバンドについても良いと思うが、実現に向けた課題もあると思うので、今後検討してほしい。

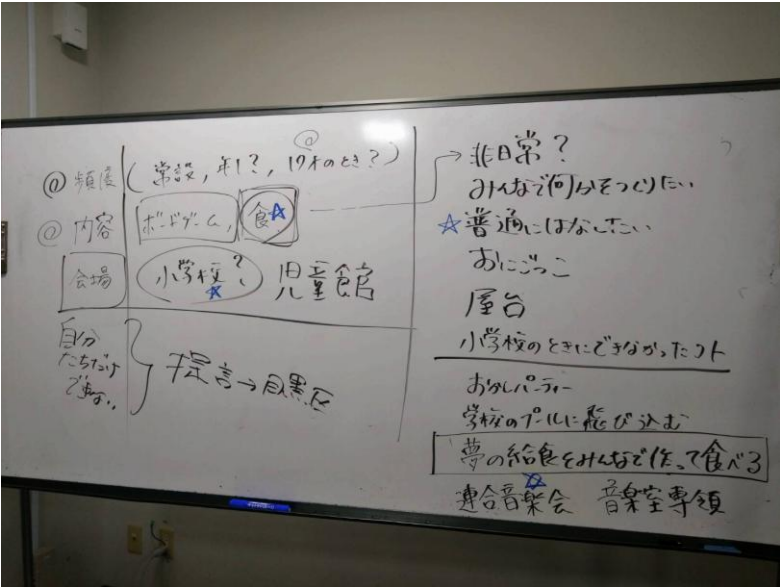
(A班板書 最終)



<画像27:A班最終板書①>

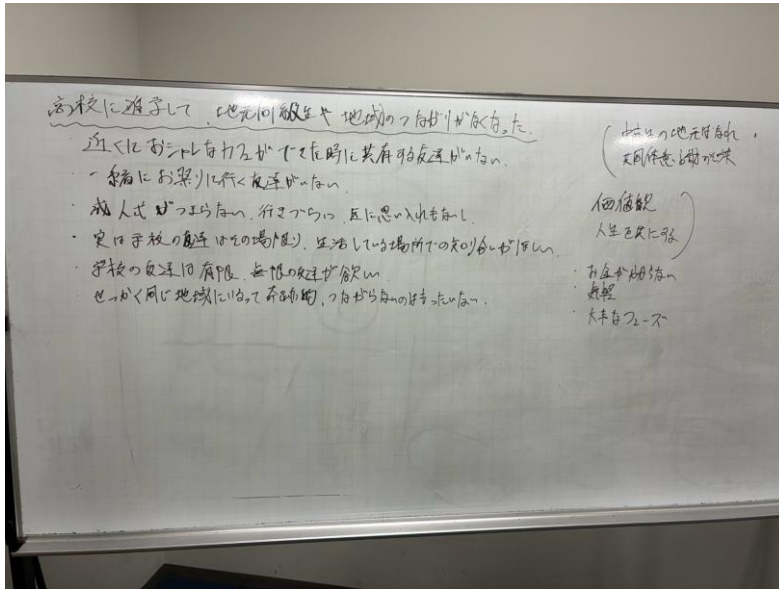


<画像28:A班最終板書②>

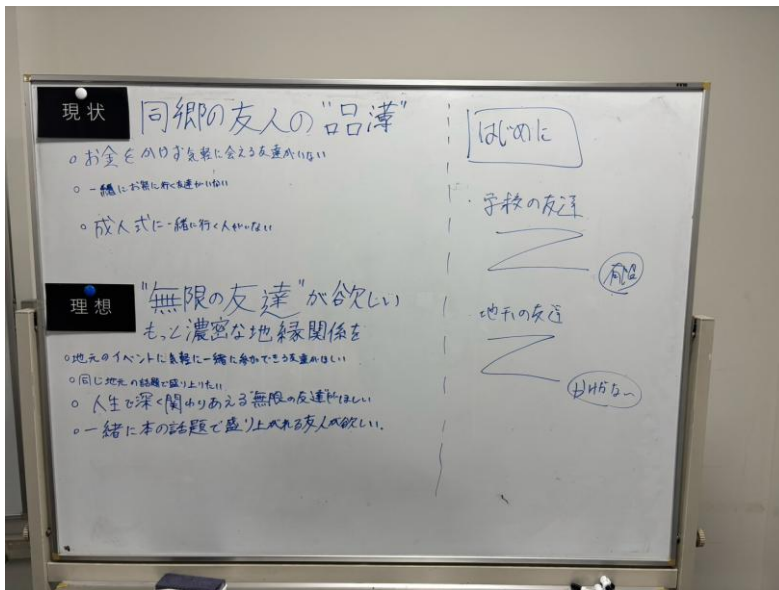


<画像29:A班最終板書③>

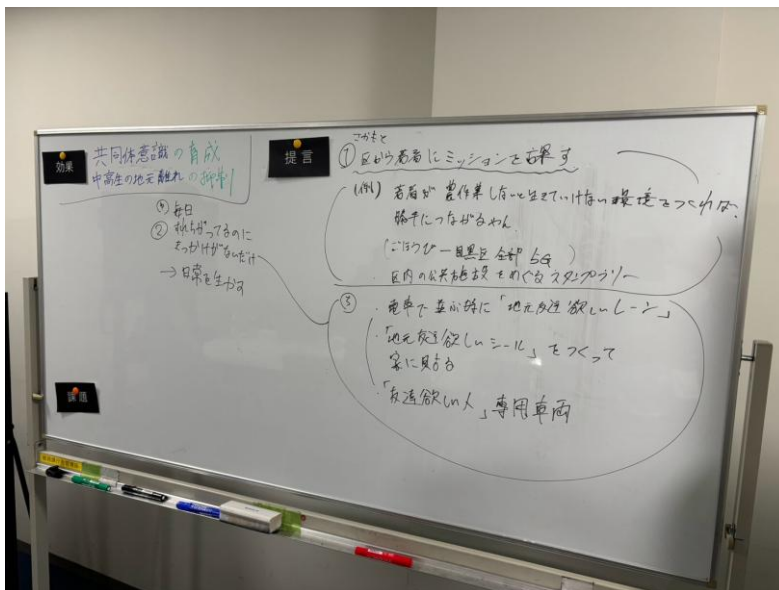
(B班板書 最終)



<画像30:B班最終板書①>



<画像31:B班最終板書②>



<画像32:B班最終板書③>

4 次回(第3回)に向けて

次回(第3回、8月22日(土)実施予定)は、今回作った提言をさらに精査し、第4回(9月5日(土)実施予定)の中間発表に向けて資料を作り込む、ということを共有し、第2回会議を終了した。

以 上